

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02462

研究課題名(和文)古英語格言詩 Maxims I, II に関する総合的研究

研究課題名(英文)A Study on Old English Gnostic Poems Maxims I and II

研究代表者

唐澤 一友 (Karasawa, Kazutomo)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00347288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまであまり詳しく研究されてこなかった古英語の格言詩 Maxims I と Maxims II についての総合的研究であり、両作品の内容、構造・構成、言語的・韻律的特徴、収録写本内における位置づけやその他の諸問題について考察を加えた。また、両作品を記録した写本に基づき、両作品のテキストを編集し、現代英語訳を作成し、詳しい注釈やグロスサリーも作成し、両作品の新たなエディションを作成した。この作業を通じ、両作品に関するこれまで解明されてこなかった様々な問題について、新たな知見を得ることが出来、それらについては、学会発表や専門誌への投稿という形で国際的に発表することが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で注目した Maxims I および Maxims II は minor poems として従来あまり詳しく研究されて来ておらず、両作品とも古英語期の雑多な詩的格言を寄せ集めたものに過ぎないという評価がなされがちであったが、本研究においては、従来よく知られてこなかったこれらの作品の詳細について明らかにすることが出来、またその成果をまとめたエディションを作成した。近い将来これが出版されれば、英語圏において両作品のエディションが出るのは1世紀以上ぶりであり、古英語文学研究の分野における有意義な成果といえる。

研究成果の概要(英文)：This study has successfully elucidated various hitherto unknown aspects of the Old English gnomic poems Maxims I and Maxims II. I have prepared a new edition of these works with detailed introduction on their contents, structure, nature, linguistic and metrical features, places in the manuscripts, etc., full commentary and glossary. I have also read papers at international conferences and published articles in international journals.

研究分野：古英語文学

キーワード：古英詩 アングロ・サクソン学

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象となる *Maxims I* および *Maxims II* はいずれもアングロ・サクソン時代の世界観や文学伝統を反映していると思われる格言をまとめた古英詩で、当時の文学や文化について知る上で有意義な情報を与えてくれる作品であるように思われる。しかしその一方で、これらに関する研究はあまり進んでおらず、謎が多く研究の余地が大いに残された作品であるのも事実である。古英語による格言について論じた主だった研究書においてすら、*Maxims I, II* はあまり大きく扱われてこなかったが、それはこれらの詩に関する研究があまり進んでおらず、そのためこれらに関して詳しいことが知られていないことと表裏一体の関係にあると考えられる。そのような状況を念頭に、本研究では、これら作品に関する総合的な研究を行い、最終的には両作品の新たなエディションを作成することにより、両作品について本研究で得られた知見を世に問おうとするものである。

2. 研究の目的

本研究は *Maxims I* および *Maxims II* と呼ばれる、アングロ・サクソン時代の格言を集めた二編の古英詩について、特にその性質や文学史上における位置づけに焦点を当てながら総合的に研究しようとするものである。これらはいずれもアングロ・サクソン時代の世界観や文学伝統をよく反映したものと考えられることから、同時代に書かれた格言等の伝統と関連する他の文献とも広く比較検討しながら、これらの詩の本質について考察する。これら二編の詩は、独立したエディションが最後に出版されてから百年以上が経過しており、その間、満足な研究が行われて来たとも言い難い状況であることを踏まえ、本研究では、これらの詩について総合的な研究を行い、その研究成果をもとに最終的には新たなエディションを作ることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、研究期間内に以下の (1) ~ (4) を行うことを予定した。

- (1) *Maxims I, II* のエディション (解説、テキスト、注釈、グロッサリー) の作成。
- (2) 両作品で用いられた言語についての分析。
- (3) 両作品を含む写本について研究し、特にその中における両作品の位置づけについて明らかにする。その際、両作品と同じ写本に含まれる別の作品についても必要に応じて順次考察・研究し、その研究成果を *Maxims I, II* の研究に利用する。
- (4) 両作品に述べられたことと、古英詩をはじめとする同時代の文献に述べられたこととの比較研究を通じ、これら両作品の性質を明らかにし、同時に両作品の文学史および文化史における位置づけを明らかにする。

初年度より (2) ~ (4) に記した研究を順次行くと同時に、その成果を論文の形にまとめて出版する。特に (3) については、本研究開始以前から研究を進めているものがあるので、それについては初年度に論文を執筆・出版する。次年度以降は (2) および (4) についても順次成果を発表する。(3) および (4) の研究をし、(1) に掲げた最終目標を達成するには、写本を所蔵する英国の図書館における現地調査が必要となるため、これも初年度より行う。また、関連分野の国内外の専門家と面談し意見交換することで、より視野の広い研究とする。(2) ~ (4) の課題について順次研究を進め、成果を発表し、研究期間終了までにはその成果を集約することで (1) に掲げたエディションを完

成させる。

4. 研究成果

上記3. に記した研究課題 (1)~(4) のそれぞれにつき、以下に示したような成果が得られた。

(2)については、*Maxims I* および *Maxims II* に用いられた言語について詳しく分析した結果、*Maxims I* は使用語彙についても韻律についてもかなり保守的であり、またアングリア方言の特徴がかなり色濃く表れているということが明らかになった。そのため、この作品は古英詩の中でもかなり早い時代にアングリア方言地域において作られたものであろうと結論付けた。一方、*Maxims II* には *Maxims I* に見られるような、より古い時代の言語の特徴を示すような語彙や語形は使われておらず、またアングリア方言の特徴もほとんど認められない。しかしその一方で、同じ写本において *Maxims II* と共に Anglo-Saxon Chronicle の序文的な位置を占める *The Menologium* の言語と比較した場合、後者のような10世紀後半以降の古英詩に見られる言語的特徴は認められないということも分かった。そのため、*Maxims II* は *Maxims I* よりは遅い時代、*The Menologium* よりは早い時代の作であり、恐らく9世紀にウェスト・サクソン方言地域で成立したものであろうと結論付けた。

(3)については、両作品がそれぞれの写本の中でどのような位置を占めるのか考察を行い、それぞれについて結論を出すことが出来た。*Maxims I* は Exeter Book の中で特に wisdom poems が集められた部分に収録されている。この箇所に収録された wisdom poems のそれぞれについて詳しく分析した結果、ここに集められた wisdom poems には共通したテーマがあるということが明らかとなり、*Maxims I* についてもその共通テーマを扱った wisdom poem であることからこの写本に記録されたのであろうと結論付けた。一方、*Maxims II* は *The Menologium* と共に Anglo-Saxon Chronicle のC写本において、Chronicleの直前に置かれ、その序文的な役割を果たすものとして意図されているようだが、本研究においては、このような manuscript context の中で *Maxims II* が具体的にどのように機能するのかということをも本作品の内容や構成等と関係づけながら考察した。*Maxims II* はアングロ・サクソン社会に広く知られた世界観や価値観について、格言を多く集めることにより示したもので、その意味でアングロ・サクソン社会とはどのような社会かを集約的に示したものと見え、これはアングロ・サクソン社会における一年の流れを集約的に示した *The Menologium* や、それに続くアングロ・サクソン・イングランドの歴史を集約した Anglo-Saxon Chronicle とともに写本に収められるのに相応しい作品であると結論付けた。

(4)については、*Maxims I* と *Maxims II* は従来、雑多な格言を集めた作品で、格言を集めることが目的であり、作品全体を通じてのテーマはなく、作品としてのまとまりもないと評価されることが多かったが、本研究においては、両作品ともに全体として共通したテーマを中心としてまとめられており、そのテーマは旧約聖書における天地創造の昔から存在する世界秩序、あるいは当時の「科学的」な知識に基づく世界秩序と密接に関係するものであるということをも、古英語期における様々な文学作品と比較しながら考察した。

(2)~(4)の研究を踏まえ、最終的には(1)に掲げた *Maxims I* および *Maxims II* の新しいエディションを作成した。研究期間の最終年度においてエディションの原稿はすべて完成し、同年度末までにはこれを出版すべく、英国の出版社に book proposal を提出することが出来た(現在審査中)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 唐澤一友	4. 巻 35
2. 論文標題 校訂本作成を支えるフィロロジー 古英詩 Menologium と Maxims I の場合	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in Medieval English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 唐澤一友	4. 巻 -
2. 論文標題 What Has Christ to do with Wyrð in Maxims II 4b-5a?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studia Neophilologica	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00393274.2020.1731707	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 唐澤一友	4. 巻 27
2. 論文標題 古英詩 Maxims II の構造と hypermetric verse について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Asterisk	6. 最初と最後の頁 1 - 20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kazutomo Karasawa	4. 巻 115.3
2. 論文標題 Lexical Choice and Poetic Freedom in the Old English Menologium	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of English and Germanic Philology	6. 最初と最後の頁 333-345
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5406/jenglgerphil.115.3.0333	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazutomo Karasawa	4. 巻 140
2. 論文標題 Tu beoth gemaeccan: The Key Concept of Maxims I Representing One of the Fundamental Principles of the World Order	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Anglia	6. 最初と最後の頁 340-372
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/ang-2022-0042	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 唐澤一友
2. 発表標題 “Human and Non-human Worlds in Maxims I and Maxims II”
3. 学会等名 日本英文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 唐澤一友
2. 発表標題 Varieties of Gnomes and Maxims in Old English Gnostic Poetry
3. 学会等名 Oxford Old English Work in Progress (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 唐澤一友
2. 発表標題 The Structure and Nature of Maxims II
3. 学会等名 Spanish Society for Medieval English Language and Literature (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 唐澤一友
2. 発表標題 古英語期における「世界」、その認識と広がり
3. 学会等名 日本中世英語英文学会東西支部会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 唐澤一友
2. 発表標題 Is Truth Trickiest? Maxims II 10a 再考
3. 学会等名 東京都立大学中世英語英文学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 唐澤一友
2. 発表標題 校訂本作成を支えるフィロロジー 古英詩MenologiumとMaxims Iの場合
3. 学会等名 日本中世英語英文学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 唐澤一友
2. 発表標題 Is Soth Trickiest? Maxims II 10a Reconsidered
3. 学会等名 Spanish Society for Medieval English Language and Literature (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Rachel A. Burns and Rafael J. Pascual	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Arc Humanities Press	5. 総ページ数 286
3. 書名 Tradition and Innovation in Old English Metre	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------